

ドーピング防止啓発講座「教えてください ドーピング防止のこと」 in 札幌 感想

期日：平成21年7月24日（金）18時30分～21時

場所：北海道立総合体育センター 2階 講堂・視聴覚室 出席者84名



東洋 彰宏 氏（北海道薬剤師会会長：挨拶）



白髪 俊穂 氏（北海道体育協会専務理事：挨拶）



米良 優二 氏（北海道体育協会スポーツ振興グループ課長：司会）と会場



本波 節子 氏（日本アンチ・ドーピング機構）



笠師 久美子 氏（北海道大学病院薬剤部）



堀井 学 氏 (スピードスケート 500m 銅メダリスト)



会場

講演1 「ドーピング防止啓発の現状と国際基準」

(財)日本アンチ・ドーピング機構ドラッグレファレンスマネージャー 本波節子 氏

日本アンチ・ドーピング機構(通称JADA)は、日本におけるドーピング防止活動の中心的存在であり、本波先生はスポーツファーマシスト認定講習会の講師もされている。スポーツの統一規則であるWADA codeにはドーピング防止の目的は「スポーツに固有の価値を保全する」ことが規定されていること、並びにドーピング防止活動とはドーピング検査のみではなく、ドーピングの予防として教育・啓発が欠かせないことから、競技会ブースでキャンペーンを行うほか、競技団体からの講演依頼にも応じ、学校にも出向き一般や児童への研修も行っているなど幅広い活動をしていると話された。スポーツへの関わりとは、「スポーツをする」だけではなく、選手のサポートや認識することも含まれると説明し、スポーツ嫌いの児童や運動を全くしない方であってもスポーツに係わることができることと述べられた。今年から始まったスポーツファーマシスト認定制度についても触れられ、改めて薬剤師への要望について説明された。選手は正しい情報をいち早く入手することで、薬を使用し体の不調を早く安全に整え、大会にも万全の体調で出場できる。薬剤師には常に新しい、正しい情報について質を確保しながら、全国に存在するスポーツ選手をサポートして頂きたいと述べられた。

講演2 「安心して競技スポーツをするために」

(財)北海道体育協会スポーツ科学委員会委員 北海道大学病院薬剤部副薬剤部長

(社)北海道薬剤師会常務理事 笠師久美子 氏

冒頭では、これまで選手、スポーツ関係者、薬剤師、医師対象に講演をしてきたが、今日の一同に会した講演を開くことができ、集まって頂いた皆様に感謝を述べられた。はじめに、有名なスポーツ選手のドーピング違反例をあげ、その中には、帯同医師の薬物投与によるもの、選手の代謝速度によるものなど選手自身の意思とは関係のない例があると話された。また不注意による違反例では、受診時に医師へ選手であることを伝えていなかったことや保管していた風邪薬を大会前に服用したため違反となってしまった日本人の例を紹介された。風邪薬や漢方を含むOTCにはマオウ(エフェドリン類)を含むものが多く、またOTCは選手の自己責任で服用するため、選手には厳しい状況であると話された。一方で、選手は薬食区分の認識があまりなく、サプリメントは薬だと思っていることや、薬を購入するときに薬剤師に相談しない傾向が増えていると説明された。さらにはサプリメントの表

示の不確かさについても触れられた。続いて具体的な処方例から、禁止物質と TUE 申請について解説された。最後に、選手の周りでその活動をサポートするには、ドーピングに関する知識だけでなく、健康や食事全般の管理と認識が必要であり自身もそのように関わっていることを説明された。

講演 3 「選手からのドーピング防止啓発への要望」

リレハンメル冬季五輪スピードスケート 500m 銅メダリスト 堀井学 氏

登別在住。美しい妻と 5 人の子持ち。冒頭では豊平川沿いで打ち上げられる花火を見ながら来館したと話された。選手時代は約 10 年も前のことなので思い出しながら講演します、と前置きされてから、スピードスケートは早くからドーピング防止教育がされており、ドーピング禁止物質には興味がなく、食事から栄養摂取していたという話から始められた。堀井氏はドーピング検査を 100 回ほど経験されており、自身のユニークな体験について語られた。競技前にはトイレに行く選手が多いが、競技終了後の採尿時には目的の量を採取するのに 2～3 時間かかるという。しかし堀井氏や同僚の清水宏保選手は競技前からトイレには行かず、検査ではさっさと採尿を済ませて帰っていたとのことだった。強い選手には競技会外検査のため、練習中にも頻りに検査員がドーピング検査のためおとずれるとのことだった。そのほか、他競技団体の選手と話をするに肉体を酷使する競技や自転車競技などではドーピングの実態もあったようだったと話された。例えばツール・ド・フランスでは、走行中に自分で注射し、溪谷に注射器を放り投げるといった話も聞いたとのことだった。終盤では高校時代に友人と薬局へ「いい薬（アンプル剤）」を購入した経験も話された。その時の薬剤師には、スポーツのため飲みたいことを告げた時にひどく怒られたということだったが、皆さんにもそのような意識をもって選手に接してほしいと話された。堀井氏は人材育成の企業から講演依頼されることが多いそうだが、自身は良いコーチや指導者に恵まれたため今でも感謝していると話し、やる気を起こす言葉がけが選手や新入社員には必要であると述べられた。

写真をご提供くださいました(財)北海道体育協会小杉英俊様へ感謝申し上げます。

以下、主催、共催、後援、特別協賛頂団体・企業名です。

主催：(財)北海道体育協会

共催：(社)北海道薬剤師会、(社)北海道医師会、(社)北海道歯科医師会、北海道病院薬剤師会

後援：北海道教育委員会

特別協賛：大塚製薬株式会社

(文責 北海道薬剤師会事務局)